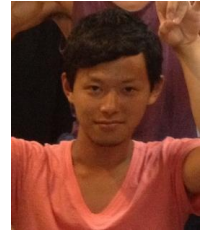


南西諸島における住居空間に関する研究

— 沖縄県宮古島市池間島の集落を対象として —



Keywords

池間島 住居調査
高齢化 離島

AK11121 山田 健太

1. はじめに

1.1 研究背景

日本各地にはさまざまな漁村が存在している。そこでは、ホシバと水回り等の空間を連続させて生産行為を行う等の、漁村特有の習慣を踏まえた特徴的な空間利用がみられている。海に向けて住居を構えるなどの特徴は、漁村にしかみられない独自の居住文化であるといえるだろう。また、南西諸島の住居において特徴的なものは、部屋割りである。主に使う部屋は1番座、2番座、3番座と呼ばれており、1番座は床の間がある客間、2番座は仏間、3番座は居間として使用されている。

しかし、集落によってその住居空間の特徴はさまざまであり、いくつかの漁村や南西諸島の集落についての先行研究があるからといって、すべての地域の空間利用の特徴がつかめるというわけではない。なぜなら立地や地形など、他の理由によってもその地域特有の居住空間が形成されており、漁村だから、南西諸島に存在しているから、という特徴のみではなく、いろいろな要因が複合されて居住空間が生成されているからである。

1.2 研究目的

本研究は、独自の文化・風習を残し、また近年の漁業の衰退と高齢化により生業が変化してきている「池間島」を調査対象とすることで、他の漁村や南西諸島の集落にはみられないような池間島独自の空間構成を明らかにしていくことが目的である。いくつかの住居サンプルから間取りの共通点を導き出し、一般化をしていくことで、「池間島らしい」住居パターンを絞っていく。それには、地域特有の気候や地理的要因が含まれていたり、文化としての家の相続や使われ方も影響していたりすると考えられる。住居空間を明らかにしていくということは、その地域の文化を明らかにすることにつながると考えられる。

1.3 研究方法

主にフィールドワークを行うことで調査を進めていく。調査地は沖縄県宮古島市平良池間に属する池間島である。調査期間は、2014年7月29日～2014年8月10日までの計13日間である。

また、調査は1グループ3人で、各自以下の3点を分担して行った。

- ① 室内の実測をし、図面を作成する（各階平面図、典型的な住居において断面図1面）。
- ② 屋外の実測をし、外構図を作成する。
- ③ 居住者へのヒアリングをする（インタビューシートを作成）。

これらの調査を、37軒の住居において行った。

2. 調査地概要

2.1 地理・自然

池間島は、宮古島の北西に位置する、馬蹄形をした島である。島全体が国指定鳥獣保護区となっている。1992年に宮古島とつながる池間大橋が建造されたことで、車での上陸が可能となった。

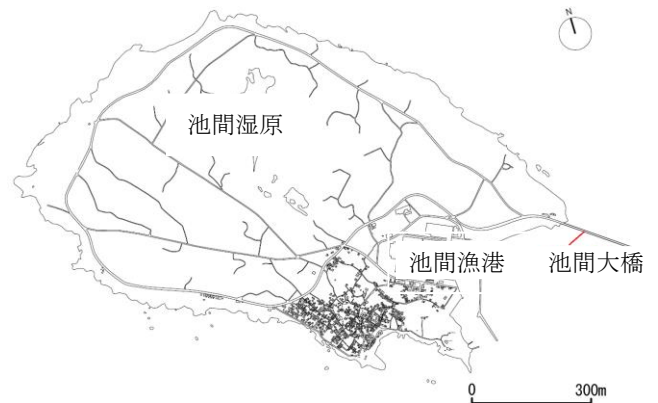


図1 池間島全体図

2.2 人口

現在、池間島の人口は360世帯670人である。この島にいつ頃から人が住み着いたのか文献には残っていないが、宮古島市平良にある西原集落は1874年、伊良部島の住民は1710年に、それぞれ池間島へと移住していることから、歴史は古いものと推察される。

3.3 産業文化

この島には独自の文化、言語が継承されている。結婚経験を有する全女性595人のうち、池間出身者は502人、島外出身は42人、不明が51人となっているが、その中の

島外というのも全体のわずか8%ほどしかなく、その8%のほとんどは佐良浜や西原等の池間系の分村である。このことから、島内部の人々の結びつきが強いということがうかがえる。

3. 住居の特徴

3.1 構造

宮古群島は台風銀座と呼ばれるほど、太平洋上を北上していく大部分の台風は宮古群島を襲う。1959年のサラ台風（宮古島台風）は風速72mを記録し、池間島では全漁船が破損、住居は多くが倒壊した。台風による被害で倒れた住居は、政府の復興資金の補助を受ける機会にRC造にするものが増えていった。

調査対象住居37軒のうち、1959年のサラ台風以前に建てられた住居が1軒、1959年に建てられた住居が30軒、不明が6軒となっている。また、1959年に建てられた1軒の住居でもリフォームが2回なされていた。

3.2 トイレ

以前この地域ではトイレと豚小屋が続いていた。しかし、不衛生であるとの考えから改良に向い、豚小屋とトイレは徐々に分離されていった。

3.3 玄関方位

玄関の配置としては、表 1 のようになった。この地域では、玄関方位は南東、南、南西と南側に寄る場合が多く、北向きの住居は少ない。

表 1 玄関の配置される方位（軒）

北東	北西	南東	南西
2	4	12	2

また、調査対象住居36軒のうち34軒では、住居の四隅が東西南北に対応している。

4. 生業

4.1 インタビュー対象者の過去の仕事の内訳

被インタビュー者とその家族59人の仕事の内訳としては、漁業が14人、公務員が10人、建設業が6人、工場勤務が6人、農業が5人、専業主婦が5人、介護が3人、観光業が1人、その他が10人となった（以前複数の仕事をしていた場合、重複してカウントした）。

以前は漁業従事者が14人と最も多く、また工場勤務者6人のうち5人は鯉節工場などの水産物に関連する工場で働いていたことがわかった。これらのことから、生活に占める漁業の割合は多かったことがわかる。

4.2 現在の生業

被インタビュー者の現在の生業を示すと、無職が28人、農業が11人、介護が4人、専業主婦が5人、漁業が4人、観光業が3人、建設業が1人、その他が5人となった（複数仕事がある場合は重複している）。

漁業が生業の中心となっていた時期と比べると、現在の漁業従事者は調査対象59人中わずか4人と、近年の漁業の衰退とともに減少していることがわかる。漁業の衰

退の要因としては、1つは排他的経済水域の設定による遠洋漁業の衰退である。またもう1つの要因としては、離島であるがゆえに、島内の仕事不足で若者たちが島を出て行ってしまい、島全体の少子高齢化が進行したことが影響していると考えられる。インタビュー対象者37名の内訳は、30歳以上50歳未満が1名、50歳以上65歳未満が7名、65歳以上が29名であったが、こうした年齢構成もそれを示している。

5. 住居の分析

5.1 間取りの不変性

以前トイレと豚小屋は並立して住居とは別棟で存在していた。そして豚小屋のなくなった現在でも、トイレが住居とは別に作られているような空間構成の住居は未だ存在している。調査対象住居のうち、一度外へ出なければトイレを利用することのできないようになっているものは5軒、以前そのようになっていたという住居は2軒確認できた。

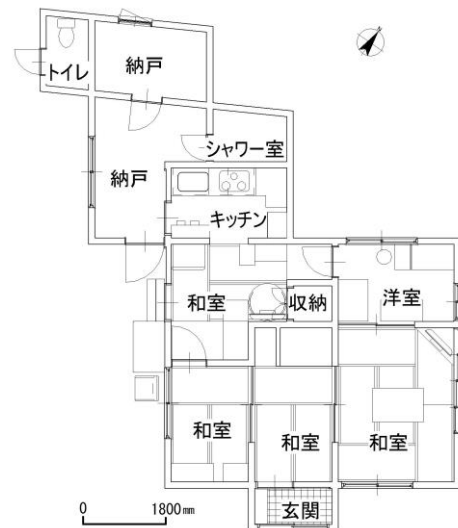


図 2 トイレの出入り口が外にある住居の例

また、この地域の伝統的な居室としては、1番座・2番座があげられる。それらは築15年程度の比較的新しい住居から築50年ほどの古い住居にも存在している。この地域ではクジャシ（1番座）、ナカユカ（2番座）と呼ばれており、沖縄独特の居室として現存し続けている。

このように、現在も変わらず昔の名残を残した間取りが存在している。大型の台風に伴う改築があっても島全体の住居が新しくなっても、生活習慣からくる間取りへの影響はその形を残したまま存在していることもあるようだ。

5.2 高齢化に伴う間取りへの影響

この地域の2階建て住居の割合をみると、36軒中9軒と、約4軒に1軒ほどが2階建て住居であった。

調査対象住居では、2階を全く利用していないという住居が1軒、同居中の娘（孫）のみが2階を利用しているというのが2軒、子供が帰省してきたときに子供のみが

使用し、自分たちは使用しないというのが2軒、物置としてのみ使用し、普段は使用していないというのが2軒であった。

2階建ての住居を2階部分の納戸の有無で比べてみると、納戸がある住居が4軒、ない住居が5軒となった。部屋配置から見ても、前述したように2階を物置として使っている傾向があることがわかる。

また、普段食事をする場所と寝る場所が同じ部屋である住居が6軒、寝る場所と食事をする場所が隣あっている部屋にある住居が11軒であった。これら2つの生活空間が近くに集まっている住居が約半数ほどみられた。

寝る場所と食事をする場所が実際にどこにあることが多いのかを、食事をする場所と寝る場所、1番座・2番座の位置がすべてわかった住居18軒のデータを基に分析する。半数にあたる9軒の住居では、1番座で寝ていることがわかった。2番座で寝ているのは3軒、その他の居室で寝ているのは6軒となった。この結果より、1番座は寝室としての機能を持つことが多いということがわかる。

また、1番座で食事をしている住居が5軒、2番座で食事をしている住居が5軒、ダイニングで食事をしている住居が9軒となった。1番座もしくは2番座で食事をとっている住居の合計が、本来食事をする場所であるダイニングよりも多くなっている。

5.3 部屋の配置に関する傾向

一番多い1番座、2番座の配置としては、図3のような配置である。もっとも玄関に近い、もしくは玄関と接続されている部屋が2番座、玄関から入って内部を見たときに、2番座の右隣にあたる部屋が1番座となっている。このタイプの配置は1番座・2番座が確認できた住居25軒のうち21軒を占めていた。

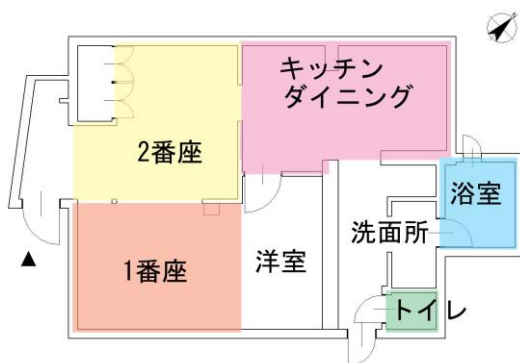


図3 住居No.1 簡易平面図

その他の配置としては、2番座の左隣に1番座があるものが2軒、1番座のみで2番座がないものが1軒、玄関から入るとまず1番座があり、隣に2番座があるものが1軒となった。

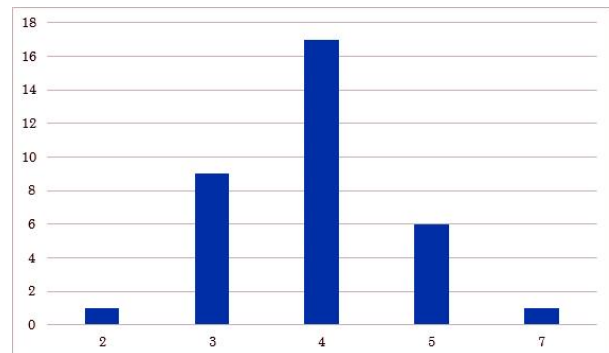
1番座の配置される方位を見ていくと、東にある住居が9軒、南にある住居が12軒、西と北はそれぞれ2軒ずつと、南と東に大きく偏る結果となった（表2）。

表2 1番座の配置される方位

東	南	西	北
9	12	2	2

34軒の住居では、キッチン・浴室・トイレはすべて隣接しているもしくは廊下を挟むが他の部屋は挟まず、もっとも近くに存在していた。これら水回りの配置としては、すべてが西-北-東側に存在している住居が37軒中29軒であった。

この地域の住居の1階部分の部屋数は4部屋が17軒と最も多い。次いで3部屋、5部屋が多く、それよりも多くなったり少なくなったりするにつれて軒数は減少していた。4部屋の内訳としては、1番座、2番座、ダイニング、洋室（和室）という部屋構成のものが多い。



グラフ1 部屋数

5.4 地域特性による住居空間

この地域では、シャワー室のみが存在している住居が多くみられる。本研究で調査対象とした住居36軒のうち、浴槽が存在していたものが20軒、シャワー室のみの住居が14軒、浴室が存在していない住居が2軒であった。

6. 考察

6.1 間取りの不変性について

ほとんどの住居では、1959年以降の改築や新築において必要な部分についての改変がなされてきているはずである。しかしながら、トイレの出入り口が外にある住居がまだ4軒残っていた。一般的には、住居の外にトイレがあるのは雨の中をわざわざ外へ向かう必要があり面倒であったり、冬の寒い日に急に外の寒いところへ出ていくのは健康への害があり危険であったりするなど、改築する必要があると考えられる。それでも木造からRC造への改築や新築がおこなわれた現在でも、その部屋配置が残されているのは、この地域特有の方位観や生業の変化等の要因が影響していると考えられる。特にトイレ配置は観光業としての民泊¹⁾に役立っている場合もある。

6.2 高齢化に伴う間取りへの影響について

平屋の住居でインタビュー調査をしていくと、いくつかの住居では部屋が狭いという声も出ていて、住居の大

¹⁾ 観光客を民家に宿泊させること。

きさへの不満が聞かれた。通常の和室を1室納戸として利用して1室減ってしまう場合もあり、モノの収納量に問題があることが推測される。モノを収納するための空間としての対策は、2階に納戸をつくりモノを収納していたり、1階に半屋外空間を増築して倉庫を併設していたりするという2つの方法がある。後者は庭に十分なスペースが必要で住居を大きくするため、大きな敷地を所有している必要がある。したがって、2階をほとんど生活空間として利用していないというこの地域での2階建て住居は、限られた敷地の広さを効率よく利用しモノをうまく収納するためのものであると推測できる。生活空間としては機能していなくとも、モノの収納場としてはおおいに活用されているといえる。

調査対象住居の約半数において、寝る場所と食事をとる場所は近くに存在していた。高齢化によって居住者の足が不自由になったことで、部屋の行き来を極力減らすために、日常的生活空間が1か所に集まっていったと考えられる。食事スペースが寝室と同化しつつあるのは、介護士によって食事の準備がなされていることで自宅のキッチンが使用がなくなったことも一つの理由としてあげられる。キッチンから寝室が離れていれば、料理を運ぶ手間があるためキッチン付近の食堂を利用する可能性が高いが、持ってきた料理を玄関から遠い北側にある食堂へとわざわざ運ぶ必要もなく、玄関に入ってすぐのテーブルのある部屋が食堂の代わりをなす傾向が強くなる。

6.3 部屋の配置に関する傾向について

玄関は南西、南、南東とすべて南側に配置されており、1番座は南と東に配置されていた。2番座は玄関と直結している住居が多いため玄関方位と同じく南側に配置されることが多いといえる。そして、この地域の住居では36軒中34軒の住居の四隅が東西南北に対応している。分析結果より、1番座の配置もすべて東西南北のいずれかであったため、1番座は住居の四隅に配置されるということが導き出される。

またこの地域の住居は4部屋で構成されたものが最も多く、この数字から離れていくにつれて住居数は減少していた。よって、この地域での一般的な住居は4部屋構成であるといえる。この一般的な住居の部屋数から、土地の広さや居住者の家族構成等の要因によって居室が増加したり減少したりしていると考えられる。2階建ての住居に関しても、この一般的な住居の部屋数をベースとして家族構成やモノの収納場所の確保に対応して居室を増加させている例であるといえる。

6.4 地域特性による住居空間について

この地域は離島であるがゆえに水と燃料に不自由であった。そして、住居に天水タンクをつける等して水を確保していた。そのような背景があるため、水の無駄遣いをしないように島民たちは節水を心掛けていたと考えら

れる。浴槽に水を溜めるのは一度に多量の水を使用してしまい、その水を温めるためには多量のエネルギーも必要となる。これらの無駄を省くためには、シャワーのみを使用するのが最も効率的だったのではないだろうか。その名残として、現在でもシャワー室のみの住居が多く存在していると考えられる。またこの地域は日本でも南西に位置し、暖かな気候に恵まれているため、浴槽に浸かって体を温める必要性が他の地域に比べると少ないというのも理由としてあげられるであろう。

7. おわりに

以上の考察からこの地域の一般的な間取りのモデルは、図4になる。平屋建てで玄関は南東-南-南西と南側に構え、居室は1番座・2番座・ダイニング・和室の4室である。特に1番座は南もしくは東側に存在しており、玄関からもっとも近くに2番座があり、キッチン・浴室・トイレの3つ(水回り)は住居の北側に寄っている。また、住居の4隅は東西南北に対応している。寝る場所には1番座が使われ、食事をする場所は1番座や2番座、ダイニングのいずれかが選ばれる。収納スペースの不足から、和室は納戸のようにモノをおいて使用される。住居の収納スペースだけでは収まりきれないほどモノを多く所有しているこの地域の居住者たちは、どのようなモノを大切に、どのようなモノを納戸で保存しているのだろうか。

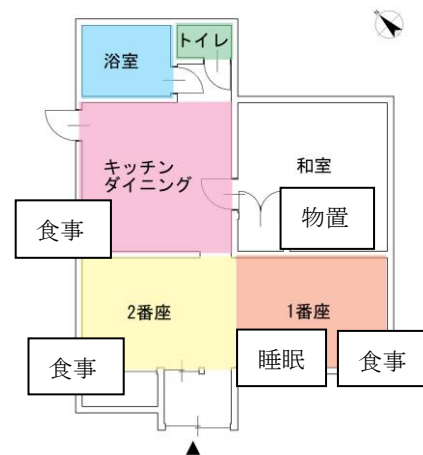


図4 一般的な住居モデル (住居No.27)

参考文献

- 1) 野口武徳 1972「沖縄池間島民俗誌」未来社
- 2) 斎藤友平・西村伸也・寺田慎二
2012「「村上市岩船における住居の空間構成に関する研究：立地を踏まえた室構成とホシバに見られる特徴的な空間利用」『学術講演梗概集 2012(建築計画)』1435-1436
- 3) 寺田 慎二・西村 伸也・小林 成光・秋山 祐亮・横山 大樹・嶋田 亮介
2011「漁村筒石の空間構成に関する研究：水回り位置と住居オモテ空間の利用からみる集住のしくみ」『学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育』